理系学部における授業外の言語文化活動
― B.O.S.T.　Language Space の実践報告 ―

服部　圭子

１．はじめに：教育実践の目的

近年、グローバル人材育成の重要性が叫ばれている。文部科学省（2011）によると、現代社会において必要とされるグローバル人材とは、「日本人としてのアイデンティティを持ちながら、広い視野に立って培われる教養と専門性、異なる言語、文化、価値を乗り越えて関係を構築するためのコミュニケーション能力と協調性、新しい価値を創造する能力、次世代までも視野に入れた社会貢献の意識などを持った人間」であり、大学においては「国際的な通用性を確保し、魅力ある教育を提供する」ことが期待されている。また、即戦力となり活躍できる人材を大学が社会に送りだすことを企業側も望んでいる。グローバル人材の要素には、語学力やコミュニケーション能力、異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティなどが含まれており[1)]、大学の語学教育が担う役割も大きい。

筆者が所属する理系学部の学生にとって、最新情報の取得や研究内容の発信のための英語力は欠かせない。学会や研究会および研究室でのコミュニケーションは、相手が英語ネイティブでなく異なる言語背景を持つ研究者の場合にも英語で行われる。将来、企業に就職した場合も同様に、英語を用いて情報入手や情報交換が行われる。そこで、英語が苦手な学生も何とか英語力を向上させたいと考えているのが現状である。しかし、グローバル化する世界や多文化・多言語化しつつある日本社会での活躍を念頭に置いた場合、大学時代に英語に加えてさまざまな外国語に触れることの意味も大きい。より広い視野を持ち自文化を客観的に眺める機会を持つことや、グローバル人材としての人間力を養う意味においても意義がある。

このような考えのもと近畿大学生物理工学部では、異文化に触れ、さまざまな言語文化的事象を見聞し、外国語でのコミュニケーションを体験する場づくりを行った。本稿は、平成 22 年度から開始したその授業外の言語文化活動である B.O.S.T.[2)] Language Space を紹介し、3 年間の活動および実践内容の報告を行うことを目的とする。

２．実践活動の背景

まず、生物理工学部の特徴について述べ、理系専門教員からの語学教育に対するニーズについて触れる。次に、授業外に言語文化活動の場を設定する必要性について述べる。

生物理工学部は、平成22年度から学部改変により生物工学科・遺伝子工学科・食品安全工学科・医用工学科・システム生命工学科・人間工学科の6学科体制となっている。研究テーマは、人間・医療・食・生活・環境・福祉などで、農学・理学・工学に医学を加えた学問領域を核とし学際的にライフサイエンス系の研究を行う学部である。学生たちは専門研究のための授業や実験に打ち込むとともに、教養科目や外国語科目を履修している。外国語に関しては、英語演習、サイエンス・イングリッシュ、英語プレゼンテーション、英語特別演習、TOEIC、オーラル・イングリッシュなどの科目が開講されており、CALL教室も活用して授業が行われている。第二外国語としては、中国語とドイツ語の学習機会が提供されている。

平成20年に理系専門教員と英語専門教員である筆者との協同プロジェクト研究を行い、『生物理工学部専門英語の手引き（ver.1）』を作成して、当該学部の学生の論文作成や資料読解に役立つ語彙や表現などを提供した。平成21年以降も英語非常勤講師とともに研究を継続し、現在は第5巻を作成中である[3)]。さらに特定分野の英語教育（ESP：English as Specific Purposes）の観点からも教材や授業運営の模索を続けている。上述の協同プロジェクトでは当時の学部所属の教員80名に対するアンケート[4)]を実施し、生物理工学部の学生に必要なジャンル[5)]を尋ねた。理系専門教員が学生に期待する英語力として上位に挙げた者は、学会誌等の要約や抄訳、各種論文の執筆や読解、図表の説明、講義中の専門用語の理解、プレゼンテーション能力や外国人学生・研究者とのコミュニケーション力であった[6)]。

一方で、国際学会のロビーや懇親会でのスモール・トークで円滑なコミュニケーションを取るためにも、日本文化を始めとする教養知識を身につけ、それらを英語で表現できることを期待する理系教員からの声もある。実際、学部には東南アジアや中東、ヨーロッパからの研究者が滞在したり、共同研究で海外に出かけたりする環境もあり、異なる背景を持つ人々への理解や知識を深め、異文化接触場面での適応力を養うことも大切であると筆者は考える。

さて、異文化接触や外国語によるコミュニケーションの機会提供という観点から見ると、学部としての課題は多い。留学生数も非常に少なく、また地方に単独で設立された理系学部なので、他学部で開催される講演会などの催しの恩恵に預かる機会も少ない。近畿大学本部キャンパスにある語学センターや「英語村 E^3（イーキューブ）」[7)]を日常的に利用することも容易ではない。その上、日本人学生と留学生の交流の機会を提供し外国語（主に第二外国語）学習への動機づけを行う「パートナーシップ」の活動や、そこで出会った学生たちが協働作業を通じて発表する「ことばのフェスティバル」[8)]という催しなどに参加して、国際交流や相互理解を経験することも難しい。筆者は以前から、本学部で

も単に学習対象としての言語ではなくコミュニケーションのための「ことば」のあり方を体感し、国際社会に適応できる人間力育成のための言語文化教育を実践する場を持つ必要性を感じていた。

そのような中、平成21年11月にカナダから訪問した高校教員と学生が自由に語る場を設けた。参加者は「自分の言いたいことを伝えるのは難しい」と感じながらも、楽しい時を過ごし、「もっと実際のコミュニケーションの場がほしい」と述べた。この活動を契機に、翌年度からはB.O.S.T. Language Spaceと名付け、外国語や他文化に触れ、外国語でコミュニケーションを取る機会の提供を本格始動した。場所は、初回は教室（演習室）で実施したが、平成22年度からは新館の一室（多目的室）を利用している。多くの講義が行われる館内ではないが、学部の理解を得て、可動式の明るい色の机・椅子や水道が利用可能で、通常の授業とは違う自由な雰囲気での学びの空間作りを心がけている。次の3.では、活動の詳細を紹介する。

３．B.O.S.T.　Language Spaceの実践活動

B.O.S.T.　Language Space（以下、適宜Language Spaceと略す）は、授業外で学生が言語文化体験や外国語コミュニケーション活動を経験する場である。ここでは、平成22年4月から、生物理工学部10号館多目的室において行われてきた活動を支える考え方と、平成24年2月までの約3年間に実施した活動内容を紹介する。

3.1.　B.O.S.T.　Language Spaceの特徴と活動を支える理論的背景

Language Spaceでは、国際英語（World Englishes）やJenkins（2007）のいう国際的共通語としての英語（English as a Lingua Franca）の考えに依拠し、英語を外国人との交流の際に用いる共通言語として捉える。そこで、母語の影響を受けた発音でも、相手に通じる英語をコミュニケーションの手段として使いこなす意義を、学生たちが経験を通じて学ぶ場とする。

Language Spaceのもう一つの大きな特徴は、多言語・多文化に目を向けることにある。つまり、言語コミュニケーションや文化理解の対象は、英語および英語圏に限らない。アメリカ主導によるグローバリゼーションでは、英語が特に重要視され、日本の外国語学習も英語一辺倒になりがちである。津田（1990）はその現象を英語支配と捉え、また国外でもPhillipson（1992）らをはじめとする英語帝国主義論者が、英語による支配構造を批判している[9)]。ここでの活動は、理系学部の学生にとって必須だとされる英語教育を推進するだけではなく、言語の多様性を認識し、互いの言葉への配慮や学び合いの精神を忘れずに意思疎通を図る姿勢を養う機会になればと考える。また、欧州評議会が促進する複言

語・複文化主義、すなわち各個人がコミュニケーションの目的のために複数の言語を使用し、複数の文化的経験を駆使できるという能力獲得のための第一歩だともいえる。第二外国語開講科目のドイツ語や中国語による活動も取り入れ、2年目からは韓国語を加えているが、可能なら他の言語や文化に触れる機会も増やして行きたい。

これは、近畿大学の外国語教育が目的に掲げている、「国際社会に対応できる英語をはじめとする外国語によるコミュニケーション能力を養うとともに、日本文化と外国文化の理解を通じ、国際感覚を高め、相互の個性を尊重し、信頼し合う精神を養うこと」[10] に合致するものであると考えている。

3.2. 活動の概要と３年間の活動内容

Language Space の活動は、(1) 外国語による会話体験、(2) 異文化体験・交流セッション、(3) 日本文化体験、(4) 映画を用いた活動、(5) ランチタイム・リーディング、(6) その他、に分類される。活動を案内するスケジュール表やポスターは、月初めに「学科共通」掲示板および電子掲示板に掲示され、学生たちはその案内を見て自主的に活動に参加する。関連の語学授業内でも、周知をお願いしている。参加者は、ポイントカードでポイントを得る。

まず、Language Space における活動の種類を年度ごとにまとめたものを表 2. に示す。平成 22 年度に試行的に実施した活動をもとに、翌年度には会話体験の種類を増加し、異文化体験や日本文化体験の充実を図った。3 年目からは、全ての学生が参加できる昼休みを利用したリーディング活動も付加している。

表２．B.O.S.T.　Language Space での活動　　（単位：コマ数）

年度	活動項目									
	(1) 会話体験				(2) 異文化体験・交流	(3) 日本文化体験	(4) 映画を用いた活動		(5) ランチタイム・リーディング	(6) その他
	英語	ドイツ語	中国語	韓国語			英語	ドイツ語		
H22	81	10	−	−	8	4	4	3	−	質問発表会
H23	193	24	16	2	11	10	−	−	毎週月〜金	学園祭
H24	161	1	16	12	9	8	−	−	毎週月〜金	体験学習

以下に、各々の活動内容を簡単に報告する。

(1)　外国語による会話体験

①　英会話活動

Language Space の主な活動として、大学院英語補助員の英語ネイティブ講師 2 名が担当する英会話活動がある。初年度の平成 21 年度は週 3 ～ 4 回（各 1 時間半）実施し、1 回に 15 ～ 20 名参加することもあったが、少人数でのコミュニケーションの機会を望む学生の声も多く、平成 22 年度以降は毎日 1 回開催している。通常 3 ～ 10 人程度の学生が集まり、リラックスした雰囲気の中で、iPad のアプリや Web 上に掲載される外国の大学授業から情報を得たり、ニュースから学んだ英語表現を用いたりして自分の意見を発信する。またゲームやクイズ、語彙遊びを通した英会話活動を行なっている。講師は自身の文化背景を用いてタイムリーな情報に対して解説を加え、学生たちが評価を意識せずに自由な質問や意見交換を行う場となっている。なお、平成 23 年度および 24 年度前期には、日本人講師による文法解説を伴った会話活動も試みた。3 年間の参加者数は表 1. に示したとおり少しずつだが増加傾向にある。

表 1．英会話活動への参加者

年度	参加者数
平成 22 年度	400
平成 23 年度	426
平成 24 年度	497

②　ドイツ語会話活動

月 1 回～ 2 回、ドイツ語の非常勤講師による会話活動を行なっている。授業中は文法学習が中心なので、Language Space では学生は何とかドイツ語で会話をする努力をする。平成 22 年度は毎回 5 ～ 7 名の参加者を得て、土曜日を利用したドイツの食べ物についての学習や試食会も行い、年間延べ 50 名程の参加者を得た。平成 23 年度は初級と中級に分けた会話活動を試みたが、毎回の参加者は 2 名～ 5 名程度であった。ドイツ語履修者の減少や、学生と講師のスケジュールの関係で平成 24 年度は毎月開催できなかった。3 年間の参加者は延べ約 100 名になるが、同じ学生の参加も多い。より広く学生が参加できる時間設定も必要である。

③　中国語会話活動

平成 23 年度より、中国語非常勤講師の協力を得て月 2 ～ 3 回の会話活動を行なっている。初級と中級に分けて実施したり、集まった学生のレベルに合わせた会話活動をしたりして試行錯誤を重ねている。旅行先での会話練習など、中国茶を飲みながら和やかな雰囲

気の中で行われている。継続的に参加する学生はいるが、参加者が多いとはいえない。以前より中国語履修者が増加傾向にあるにもかかわらず、2年間の参加延べ数は50名以下にとどまっている。平成25年度以降スケジュール設定や周知方法を改善していく予定である。

④　韓国語会話活動

平成23年にゲストスピーカー・セッションで韓国語・韓国文化の紹介をしてもらった折には、約30名の参加者があった。その後、韓国語を学びたいという声が複数寄せられ、平成24年度から会話活動を実施している。2年間の参加延べ数は約80名である。現在、最初にハングル文字の学習をした者約8名を対象に学習を積み上げて会話活動に導く方法を試みているが、初心者でも参加できる活動を並行して企画していきたいと考えている。学部が所属する地域の日韓交流行事にも、本講座の参加者を含む学生約15名がボランティアとして貢献し、訪問客を歓迎するポスターをハングル文字で作成したりして準備した。交流会で韓国語を試す学生の姿も見られた。

(2)　異文化体験・交流（ゲストスピーカー）セッション

①　学内外講師による講演

学内には時折外国からの研究者が滞在するが、研究の場以外での日本人学生との交流は少ない。Language Spaceの活動が、学生にとっては外国の言語文化事情を知る場になるとともに、海外からの研究者にとっても研究室外で日本人の学生と知り合う場となると考えた。平成22年度には、ある研究室に所属するインド人研究者に講演を依頼し、インドの生活文化や教育制度などについて語ってもらった。また平成23年、24年にヘルシンキ大学から客員教授が来日した折に、理系専門教員からの提案でフィンランドの話をしていただく機会を持ち、活発な議論が行われた。大学院生による英語での研究紹介や交流会も同時に行った。

その他、平成23年度にはドイツ語非常勤講師にベルリンの歴史文化の話をしていただき、ヨーロッパ文化への関心を深め学生の知的好奇心を満たす活動となった。外部からも講師を招き中国事情を学んだ。また韓国系ニュージーランド人講師には多文化社会の捉え方や10年間の滞日経験の話、イギリス人講師には英語との付き合い方の話をしていただいた。さらに、トルコ・アンゴラ・カンボジア・スペインに滞在経験がある元商社マン（現在JICA専門家）による異文化コミュニケーションと海外ビジネス体験談は、学生たちが将来を考える機会となった。平成24年度には、ドイツ文化事情だけではなく、中国語非常勤講師に中国文化事情や中国の若者の話を時事問題とも合わせて紹介していただく機会を設けた。また、カナダの企業で働く女性や、アメリカのミシガン州立大学の学生の大

学訪問時に講演を依頼した。

② 留学体験者を招いての報告会

海外留学経験者による報告会も開催している。平成22年度にはカナダへのインターンシップ参加者、アメリカカリフォルニアデイビス校への夏期短期留学者、平成24年度にはアイルランドやカリフォルニアへの夏期短期留学者が、写真や講習時の資料などを提示しながら報告した。発表者にとっては留学を振り返り、事前に何度も練習を重ねて英語で発表する経験となるが、後輩たちへの留学紹介としても機能し、将来の目標設定への影響も大きい。

③ 学生運営によるクリスマス会

英語活動を行っている教員が担当する「英語スキル上級B」の受講生が中心となり、毎年12月に全校学生に参加を呼びかけてクリスマス会を企画している。平成22年にはア・カペラサークルや吹奏楽サークル、平成23年からはダンスサークルも参画した。企画委員会を設け、学生がクイズやゲームの内容を考え、英語での司会や進行を担当する学生主体のクリスマス会である。外部からのアメリカ人ゲストスピーカーを招いたこともあるが、司会の学生たちがその場で作文して英語で説明を加えたり、アドリブ通訳を行う場面もあり、円滑に会を進めるための工夫や行動を経験する機会ともなった。毎年50名ほどの参加者がある。

(3) 日本文化体験

自分の文化についての知識や経験を持ち、それらを説明できることも異文化を背景とする人々との交流の場面では大切である。裏千家（Urasenke International Association）に所属する英語非常勤講師の協力を得て、平成22年度に「ミニお茶会」を開催しDVDを用いた茶道の説明やお点前のデモンストレーションを行った。外部からマレーシア・中国・アメリカからのゲストおよび一般参加者も招き、地域との連携の足がかりとなる可能性を示唆する催しとなった。この催しは日本文化体験として発展し、平成23年度より月に1～2回、NHKのトラッドジャパン等の語学番組や日本文化に関するDVDなどを用いた英語による日本文化の説明練習と、お茶の割り稽古を行なっている。抹茶を飲み、英語のフレーズを学びながら実際にお茶を立てる茶道入門体験もしている。平成23年度の学園祭の来校者には、英語で茶道を楽しむ機会を提供した。

(4) 映像を用いた活動

映画などの動画を用いて、その中で扱われている異文化や言語表現を楽しむ活動を実施した。資料を用いた解説を加えて学生の語学力アップを図ることを目指した講座である。

平成22年度に、英語による映像を用いた活動を4回、ドイツ語による映像を用いた活動は3回実施したが、授業などで忙しい学生がまとまった時間をとるのは難しく、より多くの参加者を募ることが課題となり、平成23年度からは、会話活動に踏襲することにした。

(5)　ランチタイム・リーディング

平成23年度から、昼休みを利用してMc Graw Hill出版のSRA Science Labs（Life Science, Earth Science, Physical Scienceの3シリーズ）を用いた多読活動を行なっている。昼の15～20分間、自分のペースで基礎的な理系の内容を読み、毎回記録をつける。この活動は、速読力や文章把握力を養うだけでなく、将来理系分野の論文を読むための準備にもなっている。

(6)　その他の活動

平成22年度には「英語質問コーナー」や研究発表の機会を設けた。研究発表に関しては、英語活動との連携で引き続き行われている。また、平成23年度以降には、学園祭（きのくに祭）や、オープンキャンパスでの体験学習の場としての機能も担っている。

次に、参加者の実態把握のため、平成24年度の英語活動（学年記載があった者）を取り上げて学年ごとの参加人数を調べた。結果は表3.に示したとおりである。

表3．学年ごとの参加者数　　単位：人

学年	1	2	3	4	M1	M2
学生数	153（36%）	30（7%）	81（19%）	90（21%）	52（12%）	11（5%）

1年生の参加者が36％と多いのは、一部の英語授業で見学を行った影響もあるだろう。理由については今後詳細を調査する必要があるが、2年生で7%と激変しているのは、1年生後半から授業や実験の増加により学生に授業外の活動に参加する余裕がないからではないかと推測される。そして、3年生19％、4年生21％と増加しているのは、語学授業が減る上に就職や進学の関係での必然性も加わるからだと考えられる。また1年生の多くが語学教員からの案内で情報を得ているのに対し、高学年の学生は自主的に掲示板の案内や友人の誘いにより参加している。平成22年度に1年生だった学生が3年生に進学していることや筆者の赴任当時の学生が大学院生になっていることなどで、活動自体の周知が以前よりは行き渡ったとも考えられる。大学院生については、英語活動担当教員のクラス内や

研究室で促され、学会発表準備や発話機会を得るために来ている者も多い。

3.3. B.O.S.T. Language Space に参加した学生の反応や学び

Language Space の参加者には活動終了後に簡単なアンケート用紙に記入してもらい、学科・学年、活動内容や感想、新しい発見の有無や今後の希望などについて簡単に尋ねている。ここでは、学生からの毎回のアンケート（自由記述）をもとに、参加した学生の感想を示す[11)]。

(1) 感想、学んだことについて

多くの学生が、日頃出会わない他学科の学生や院生と英語を使って会話できたことが楽しいという感想を持っている。「内容や質問がわかれば、話についていけた」ことや「自分で topic を考えて説明するところ」などに喜びを感じたようだ。ポッドキャストやニュースの利用、大統領や理系関係者のスピーチの聴解などの活動方法や、アメリカ目線のニュースの解説などに興味を示し、「普段聞けないことを聞ける」「生活で使えそうな英語を教えてもらえる」ので積極的に学べるという意見もある。

異文化交流に関しては、「インドについてあまり知らなかったので、新しいことが知れたのは良かったです」「日本と異なった文化を持つ方々の話を聞いて、フィンランドについて少し知ることができた。機会があればフィンランドに行ってみたいと思うので、もう少し交流を深めたいと切実に思った」のように、新しい知識や情報を得て考えたことを述べている。その他「英語の訛り方がとても勉強になりました。国によって違うみたいなので、他の国の方の英語も聞きたいです」のような音声面への気付きや、「英語が使えるのが面白い。オープンな雰囲気で研究内容ではなくプライベートな話ができて良かったと思う」「座って話を聞くのではなく、もっと一緒に色々話ができるような形だったらいい」「通訳は嬉しいが、同時だとどっちを聞いて良いかわからない」など会の持ち方に対する意見が述べられた。また、日本文化体験に関して「楽しく学び」「茶道のやり方が学べて勉強になる」だけでなく、毎回のお茶を楽しみにする者やマナーの難しさへの気付きに言及する学生もある。中国語は「授業のような感じでなくて良い」、「少しずつでも韓国語がわかってきているのでおもしろい」、「ドイツ語がほとんど聞き取れなくて」字幕に頼ったが、内容が面白かったので「原作で読んでみたい」という積極的な態度も示されていた。

反対に、語彙不足や話すタイミングの難しさを痛感し、外国の人とのコミュニケーションでは「英語のスピーキング、リスニングができないと難しいことを身をもって知る良い機会になった」「講義でのジョークすら気づけず悔しかった」という意見もあった。

(2)　言語に対する考え方・気付きについて

言語に対しては「生で聞いて質問をその場でする」大切さを感じ、「今まで勉強した受験英語とは全く違って『喋る』ことが重要なので頭に入りやすい」「アウトプットして覚える勉強も重要だとあらためて思った」など、英語を学習対象として捉えているものの、生きたことばとの付き合いを考え始めている。そして、「簡単な英語でも伝えることができる」「思っていたほど英語が難しすぎない」「英語は未知数（未完成）で良い」など、英語学習に対する堅苦しさから少し脱皮し発想転換ができた者もいるようだ。さらに、「外国の人から見た日本」を通して自国を客観視する大切さに気づいた者もいる。また、英語ネイティブではない講演者の英語によるスピーチから「英語の多様性」を肌で感じたり、アメリカのニュースを見て講師の解説を聞き英語でやり取りすることで「アメリカなどでの英語の正確さへの厳しさ」を知る経験をした。それらを通して、言語を「使う」ことを意識するようになってきている。「外国に行ってみたくなった」とモチベーションの高揚に触れた感想もあった。

(3)　自分自身の態度について

Language Space の活動には気軽に参加でき「失敗しても恥ずかしがらずに会話ができる」利点があることへの言及もあり、「ここに来て英語になれること」から始めたい、「辞書を持ってきて、もっと自分から話をしたい」と思うようになった学生もいる。そして、「英語を読めるだけでなく、使えるようになろうと思うようになりたい」と、今後の自分自身への課題に言及した者もいる。仲間の発表態度を見聞きして、「みんな即席ですごかった」「原稿なしでのスピーチがすごい」と刺激を受けたり、「自分の納得の行く発表ができた」と時間をかけて準備した成果を味わう声もあった。「人と会話する中で考えることが一人で勉強するよりも英語の考え方がまとまりやすくなる」「同じ人間が話す言葉だから楽しく覚えようという考え方に変わった」という意見もある。

(4)　課題やリクエストについて

学生の要望には、活動時間の増加、海外の学校・外国からの研究者や留学生との交流、お茶会の開催などがあった。第二外国語に関心があるが「授業と重なって参加できない」と時間割調整に関する意見も見られた。扱って欲しいトピックは、理系（生物、科学）、政治、歴史、日本以外の文化、専門以外の話、日本との文化の違い、英語の歌などが挙げられている。

４．おわりに：今後の課題と展開

本稿では、近畿大学生物理工学部における B.O.S.T.　Language Space の活動の目的や意義を述べた上で、平成 22 度から 3 年間の活動を報告した。主体となる英会話活動の遂行には 2 名の大学院英語補助教員の貢献が非常に大きい。国際的共通語としての英語を重視する一方で、複言語能力の養成も意識し、第二外国語の非常勤講師の協力による活動も試みている。英語とは違いほとんどの学生が大学から始める言語なので、より多くの学生の参加を得るためには丁寧なレベル分けや文化紹介の増加に加え、検定を目標にするなどの方法を工夫する必要がある。今後、これらの活動と授業の関連を考えることや、理系専門教員の協力と助言を仰ぐこと、また学内の Web 機能を利用して周知を充実していくことも大切である。

活動は 3 年間で徐々に広がりつつあり、参加した学生は多側面での学びを経験している。日本文化紹介やお茶の経験は、留学を希望する学生が集まる場にもなるとともに、学年を越えた参加者との協働作業を始める場ともなっている。今後は同年代の留学生との交流会や他学部および地域との連携による催しの企画も意識している。

今回は B.O.S.T. Language Space の活動概要の紹介を主に行い、理系学部における言語文化教育の一例を提示することにとどまった。今後は、個々の活動を掘り下げて分析し活動の教育効果を検討するとともに、参加者の背景の詳細分析や活動を担当する教員への聞き取りなどを行って、活動内容の充実や改善に務める必要がある。さらに、参加者の感想のミクロな分析やインタビューにより学びの実態を明らかにしていくことも課題である。

注

1）　文部科学省（2012）では、「グローバル人材」の概念を、要素Ⅰ： 語学力・コミュニケーション能力、要素Ⅱ： 主体性・積極性、チャレンジ精神、協調性・柔軟性、責任感・使命感、要素Ⅲ： 異文化に対する理解と日本人としてのアイデンティティと整理している。その他、幅広い教養と深い専門性、課題発見・解決能力、チームワークと（異質な者の集団をまとめる）リーダーシップ、公共性・倫理観、メディア・リテラシー等を挙げている。

2）　B.O.S.T. とは Faculty of Biology-Oriented Science and Technology（生物理工学部）の略。

3）　平成 20 年度の近畿大学学内研究助成金 21 世紀教育開発奨励金（教育推進）による「生物理工学教育における基礎英語と専門英語との融合」プロジェクトに始まった研究であり、生物理工学部戦略的研究助成金を得て、継続的に研究成果を「生物理工学

部　専門英語の手引き（ver.1 ～ 4）」としてまとめている。「B.O.S.T. Word List」「B.O.S.T. Word Check」「B.O.S.T. Quiz」などを掲載している。

4）当時は生物工学・遺伝子工学・電子システム工学・知能システム工学・生体機械工学の5学科であった。教員には、①学生に必要な英語のジャンル、②専門分野で基本となる英単語、③専門分野で使用する多義語、④学生に読ませたい専門分野の英語ジャーナル、⑤英語で書かれた基本的なテキスト、⑥ゼミにおける英語教育の目的と内容などについて尋ねた。

5）Bhatia（1993）は、コミュニケーションに関与する人々が使用する「高度に構造化され」「慣習化された」ジャンルテキストがあり、当該のディスコース・コミュニティ（談話集合体である専門家集団）での知識構築には、ジャンルを理解し駆使することが必要だと説明している。

6）結果の詳細は、「理系大学における取り組み－専門教員と英語担当教員との連携試み－」大学英語教育学会、関西支部春季大会、コロキアムにて発表した。

7）E^3 は、“English”, “Enjoyment”, “Education” の３つの “E” を表し、「笑顔で英語とふれあう空間」をキャッチフレーズに開始した「英語の遊び場」。外国人講師によるダンス、ギター、料理、クイズ教室、世界文化講座や、各種イベントが開催され、一般にも開放されている。

8）「パートナーシップ」や「ことばのフェスティバル」に関しては、酒匂康裕・林君枝（2011）「学生交流から始める国際化　その３－第二外国語の履修学生と留学生の教育活動報告及び今後の展開－」『近畿大学教養・外国語教育センター紀要（外国語編）』第１巻第２号や、魏・酒匂（2009）、酒匂・徳永・大東（2010）に詳しい。

9）国内では大石（1990）、津田（2003、2005）など、国外ではPennycook（1994）、Phillipson（1992）などが英語帝国主義に関する議論として参考になる。

10）「近畿大学外国語教育の目的と共通基本目標―外国語教育マニフェスト―」による。

11）平成22年度の活動については、当時のアンケートに加えて2011年１月に実施したインタビュー（各30分×３回、１・２年生対象）の録音資料も一部参考にした。

参考文献

Bhatia, V.（2004）*Worlds of Discourse: A Genre-Based View*, Continuum International Publishing.

Jenkins, Jennifer（2007）*English as a Lingua Franca*, Oxford University Press

Phillipson, Robert.（1992）*Linguistic Imperialism*, Oxford University Press.

Quirk, Randolph（1981）“International Communication and the Concept of Nuclear English”, In Smith, Larry E.（ed.）, *English for Cross-Cultural Communication*, 151-165, Macmillan

津田幸男（1990）『英語支配の構造－日本人と異文化コミュニケーション』第三書館

服部圭子（2009）「生物理工学教育における基礎教育と専門教育との融合－生物理工学部専門英語の手引き（ver.1）」、21 世紀教育開発奨励金【教育推進研究助成金】による事業、近畿大学生物理工学部

服部圭子（2010/2011/2012）「生物理工学部　専門英語の手引き（ver.2 ～ 4）－ B.O.S.T. WORDS」、【生物理工学部戦略的研究】による事業、近畿大学生物理工学部

服部圭子・坂田直樹（2011）「英語科における授業外の取り組み－英語特別講座およびランゲージ・スペース（B.O.S.T.　Language Space）での言語活動－」『リベラル・アーツ』近畿大学生物理工学部　教養・基礎教育部門、創刊号：15－27.

細川英雄・西山教行編（2010）『複言語・複文化主義とは何か－ヨーロッパの理念・状況から日本における受容・文脈化へ』くろしお出版

文部科学省（2011）「産学官によるグローバル人材の育成のための戦略」産学連携によるグローバル人材育成推進会議最終報告
http://www.mext.go.jp/component/a_menu/education/detail/__icsFiles/afieldfile/2011/06/01/1301460_1.pdf

文部科学省（2012）「グローバル人材育成戦略（グローバル人材育成推進会議 審議まとめ）」第 2 回グローバル人材育成推進会議資料
http://www.kantei.go.jp/jp/singi/global/1206011matome.pdf